標本作製法

ちょっとこだわったチョウの展翅①　―小道具など―

諏訪哲夫

　標本は不格好に展翅されていてもしっかり書かれたラベルさえ付いていれば本来の目的を満足しているとも言えますが、整った展翅でないと標本箱に無駄なくきれいに収まらないことや、また展示に使用する機会も多いので美しい標本を作ることが望まれます。
今回はちょっとこだわった標本の作り方により、乾燥して硬くなってしまったチョウの展翅の方法について２回に分けて解説します。

展翅のための小道具

①　展翅板≪写真１≫
チョウはシジミチョウからアゲハチョウの仲間まで翅の大きさ、胴体の太さなど様々で、個体にあった大きさの展翅板を選びます。翅を広げた時に展翅板から翅が外にはみ出さないこと、胴体の太さより３㎜位溝の幅が広いことを目安に選びます。溝はなるべく胴体の太さギリギリが良いのですが、余裕を見るのは後述するように、翅の基部に塗った接着剤が展翅板の溝の内側にも誤って着くことがあり、展翅板から標本を外せなくならないよう安全を期すためです。展翅板は表面が水平なものと、外側に向かってわずかに上方に傾斜しているものがあります。シジミチョウなど以外には傾斜を使っています。

②　展翅テープ
　昆虫用具専門店でパラフィン紙、スーパー展翅テープなどが売られていますが、私はチョウの大きさなどによって幅を微妙に変えて切りますので、切りやすい半透明のグラフ

写真１　展翅版

写真２　柄付針

写真３　軟化剤

写真４　接着剤

用紙（方眼紙）を使っています。

③　昆虫針
　昆虫標本作成用の特殊な針です。ピンの頭が丸く太くなっているものと、無頭のもの、太さは細い順に 00 号、0 号、1 号・・・5 号があってチョウの場合、シジミチョウは 1 号、アゲハチョウなど大きなものは 3 号がおおよその目安です。できればなるべく太いもので有頭のピンがラベルに刺しやすく、標本を並べ替えるなどの整理する場合には扱いやすくおすすめです。

④　留め針
　テープを留めるために使います。なるべく先端が鋭利なピンを選びます。腹部を水平に保つために長い 45 ㎜位のピンがあると便利です。いわゆる待ち針といって市販されています。

⑤　柄付針（柄付で先端部が 45°くらい曲がったもの）≪写真 2≫
　触角の整形などの細かい作業には大変重宝です。翅の整形には使いません。

⑥　軟化剤≪写真 3≫
　チョウは乾燥すると固くなって翅が開かなくなるので、錠剤 1 個をフィルムケース一杯の水で溶いた水溶液を注射して柔らかくします。タンパク質分解酵素を含む胃薬（新タカヂア錠など）を使います。

⑦　接着剤≪写真 4≫
　柔らかくなった翅の付け根に接着剤を付けて固めます。市販の水溶性の木工用セメダインなどを水で薄めて使います。

⑧　注射器
　シジミチョウなど小さく細い胴体に刺すこともあるので、注射針はなるべく細いものを使います。個人では自由に買えないので入手は NPO にご相談ください。

⑨　ラベル用紙
　ラベルはパソコンで作りプリントしています。用紙は普通紙を使うと厚みが薄いため標本に付けた後くるくる回ってしまうので厚手の用紙（フォトマット紙 0.23 ㎜など）を使います。

乾燥した標本をちょっとこだわって展翅
採集したチョウは夏などでは三角ケースに入れておいたものは 1 日でかなり硬くなってしまいます。1 週間も採集旅行に行った時の採集品や、まして 20 年を経過した昔の採集品となるとそのままでは展翅は全く困難です。そこで乾燥して硬くなった採集品を展翅する方法と、さらにこだわった美しい標本を目指して作り方を解説します。展翅の方法は基本的には同好者皆ほぼ同じですが、細部については十人十色でそれぞれ長所短所があります。今回は私が永年自分で工夫したり、他の同好者に教えていただいたりして少しずつ改良していったものです。今後もさらにアドバイスをいただき工夫、改良をしていきたいと思います。
　展翅の方法は図鑑などに解説が出ていますが、乾燥した標本を軟化して展翅する方法としては十分説明されているとは言えないので、改めて展翅の仕方の基本をお示しします。

①　展翅の出来上がりの標本は胴体を中心線として、翅と触角の広げ方が左右対称であること

②　三角紙に入れられて固まったものは触角が曲がっていることが多いので、これを整形すること

③　同時に頭部がねじれていることがほとんどなので、ねじれを直し正面を向かせること

④　硬くなった標本を十分軟化すること
この 4 点に気を遣えばかなり見栄えがする標本となるでしょう。

　次号では硬くなったチョウの軟化展翅の具体的な方法を解説します。